

回想 わたしの中の松枝茂夫先生

杉本達夫

松枝直子夫人が詠まれた俳句の中に「ポスト見にまたポスト見に秋の午後」という一句がある。秋の午後、何度もポストを見に行くのはご自身ではない。ご夫君すなわち松枝茂夫先生の、晩年のある日の姿なのであろう。届くはずの便りを待ちかねて、落ち着かぬひと時であったのだろうか。それとも配達予定外の時間に、思わぬ便りが来ることを期待されたのだろうか。和服の着流しに長身を包み、豊かで黒い髪がてっぺんでやや乱れ、黒縁の眼鏡の奥に細い目が微笑み、顎鬚が重たく垂れている。長身をやや前かがみに、足ばやに玄関まで出てポストを見る……。そんな先生の姿を、わたしは勝手に思い浮かべる。

夫人は俳句に親しんでこられた。夫人の作から佳句を選んで、先生が白紙に書き写し、表紙を付けて仕立て上げられた、たった一冊だけの手作りの句集を、わたしは拝見したことがある。句集がそのあと何冊か作られたのかどうか、わたしは知らないが、そういう手間ひまかけた手作りの過程が、先生には心たのしい時間であったにちがいない。これは夫人から伺ったことであるが、先生の最期に近いころのある夜、夫人が本を読みながら、寝入る先生の枕元に座していると、先生がふと目覚めて、「あなたはまだ勉強ですか」と声をかけられ、夫人は「わたしはものを知りませんから、勉強しません」と答えられたのだそうだ。夫人もずいぶんと読書なさっていた。先生は夫人に対しても、ふだんから丁寧なことばで対応されていた。おふたりで並んで散歩される際にも、お

互いにやわらかで丁寧なことばが笑顔を包んでいたことだろう。ひょっとして先生は、自分たち夫婦の姿に、遠く二百年も前の郝懿行夫婦を思い浮かべておいでではなかったのだろうか。根拠はないが、そんな気がする。

わたしは一九五九年に東京都立大学の大学院に入り、以来、幾度先生のお宅を訪れたか知れない。在學生も卒業生も、幾度幾人訪れたか知れない。当時の先生はたくさんの仕事を抱えて、寸刻を惜しみたい心境であったろうのに、わたしたちは先生の事情に気づきもせず、もてなされるままに酒を飲み、はしゃいでた。先生は寡黙であり、多くの場合、わたしたちの黄色い嘴から出る愚論の聞き役に回られた。問われるままに、ぼつりぼつりと若い日の経験や、作家作品への評価印象を口にされることはあったが、教え導く風はさらさらなかった。わたしたちは甘え、先生や夫人にもてなされてついつい長居をし、いよいよ先生の貴重な時間を奪った。ご家族にはなんとも迷惑であったにちがいない。先生の学識はどれほどの深さと広がりを持つのだろう。読書はどれほどの量と質を持つのだろう。感覚の鋭さはどれほどに磨かれているのだろう。だがそれらはすべて、穏やかな表情の裏に隠されており、わたしたちはそれを測る尺度を持たなかった。大きく叩けば大きく響く対象であったのに、小さく叩くことしかできなかった。とはいえ、先生の真贋を見抜く目の怖さは十分に感じていた。わたしなどは後になって、自分の卑小さが、先生の目にどう映っていたかと、身の縮む思いを消せないでいる。そう言いながら、先生ご夫妻には仲人をお願いしたほか、ことばに尽くせぬご厚情をいただいている。

先生は付き合いがよかったのだ。遠足にも、合宿にも、欠かさず参加されたし、野球にも出場された。一時期、都立大中文は東大中文と年に一度、会場を持ち回りで野球の試合をした。実力は伯仲と言っておこう。先生は一塁を守り、美技はないものの、派手なエラーもなく、堅実な守備であったと思う。東大が竹田晃投手を出してきた時は、さすがに都立大の打線は沈黙した。そんな中でわたしは都立大唯一の長打を放った。これがわたしの貧しい自慢の種である。

東大の側にも自慢の種の持ち主はいるが、それは言わない。

かつて都立大学には、外国文学研究者で作る『世界文学』という小さな雑誌があった。一九五九年の岡崎俊夫氏逝去のあと、先生は同誌に短い短い追悼文を寄せ、その一節に遠い日の中国文学研究会を回想して、「武田はこつこつ勉強して学者になると思われ、ときどきとっぴな案を出したが、だいたいの企画は竹内が立てて岡崎がまとめあげ、それをまた竹内にこっぴどく叩かれ泣かされていた」と書かれていた。当時の三人の姿が浮かび出るようで、絶妙の表現である。先生は文集の中で、竹内にコテンコテンにやっつけられていたとか、竹内の鲁迅訳と松枝の周作人訳の訳文を巡って批判し合ったとか、何か所かで書かれているが、それはこの光景より後の事になるだろう。七〇年代であったと思うが、どの雑誌であったか、竹内好が松枝茂夫にあてた長い手紙が掲載されていた。わたしの記憶が間違っているといけなくのだけれど、研究会のありかた、自分の歩むべき道、等々さまざまに思い悩む胸中を綴り、松枝に訴えかけていた。悩める若者が母にすがっているような雰囲気が漂い出ている、ちょっと意外な気がした。

一九四二年、竹内と松枝は北平から開封まで、連れだって旅をする。松枝先生はこの旅を振りかえって、あんな楽しい旅はなかったと言い、旅の道連れとして、竹内ほどに楽しい相手はいないと書いておいである。日本占領下の面白くない空気の中、まだ三〇代の、口の重い松枝と舌鋒鋭い竹内が、いったいどんな会話を交わしたのだろうか。戦時下の日本と中国の今日と明日が、ふたりにはどのように見えていたのだろうか。(ついでながら、翌四三年の秋、老舎夫人胡絮青が三児を連れて、北平から重慶までの苦難の旅に出、開封で列車を乗り換える。こちらは日本軍により検問され、消毒液を浴びせられる。駅外で食事をした際、こどもがたずねる。「どうしてここでは、こんな白くて大きいマントウがあるの?」。北平の中国人は小麦粉など口にできなかったのである)

わたしが入学したとき、竹内松枝両先生とも教授であった。多忙な教授であった。教員の研究室は相部屋で、両先生を含めて六名が同居していた。だから教員同士、顔を合わせる機会はいくらもあった。だが、両先生が話し込んでいる場面を、わたしは見たことがない。あるとき、あるいは竹内先生の発案であったのかと思うが、教員と学生合同の共同研究が試みられた。ひとつの材料を多面的に検討する目論見で、まず人民共和国憲法前文が材料になった。だがこの試みは、なぜかはやばやと霧消してしまった。先生方もそれぞれに忙しかっただろうし、学生もバイトで忙しかった。大学の内でも外でも、政治が風雲急を告げていた。そして、六〇年安保闘争の高まりの中で、竹内先生が抗議の辞職をされた。竹内先生を失うことは、学生にとって大打撃である。その衝撃を訴え、岸内閣に抗議するピラを作って、わたしたちは街頭で配った。松枝先生も学生とともに外に出て、ピラを配り、抗議行動をされた。反対運動の高まりとともに、大学はすでに開店休業状態で、集会、討論、デモの準備に明け暮れていた。国会を取り巻くデモ隊の上に、「竹内やめるな岸やめろ！」の声が、スピーカーから流れていた。

竹内先生の辞職は、わたしたち学生には青天の霹靂だったけれど、松枝先生たちは別の見方をされていた。竹内先生は教職を辞めたくてうずうずしており、それはよく分かっていた。それが政権への抗議という機会をとらえて、最も効果的な辞め方をしたのだと、松枝先生は漏らされていた。

デモが忙しくても、アルバイトは休めない。勉強する暇がなくても、留年するゆとりはない。わたしは準備の足りないまま、不備だらけの修論を書上げ、博士課程に入った。博士課程の受験に当たっては、あんな修論が審査にどうか、博士に入って自分に何ができるか、わたしは不安でたまらず、松枝先生宅に相談に行った。こんなことは相談されても答えられるものではないだろう。けれど先生は即座に受けなさいよと言われ、わたしはちよっぴりほっとした。そしてどういふ風の吹き回しか、卒業式の日、わたしは修士の総代となっ

て壇上で学位記を受け取った。折から東京で、アジアアフリカ作家会議が開かれており、わたしは竹内実先生の紹介で、事務局でアルバイトをし、中国の作家たちをすぐそばで見た。東京で珍しく雪の降る中を、巴金と同じ自動車に乗って移動した。わたしにとっては、じつに波乱に富んだ一年となった。

竹内先生は学年途中に、学生を放り出す形で辞めたことで、学生に対する責任を痛感し続けられたに違いない。その後も学生たちとの交流は様々な形で続いた。当時の学生たちが作る「柿の会」のひとりが発起して、竹内松枝両先生を監修に引出し、徳間書店から先秦思想家の翻訳を出すことになった。わたしも訳者に加わったが、たとえば言えば、序二段の力士が幕の内で戦うようなもので、無力は重々分かっているから必死だった。訳者グループの学習会、検討会に両先生とも参加され、竹内先生は訳者の解釈を問いつめ、文章のたるみを突き、散々油汗を流させて鍛えられた。松枝先生はほとんど口出しをされなかったが、漬物石と言おうか、在席されるだけでわたしたちは安心感を覚えていた。そして、時おり出されるひと言が万鈞の重みをもった。もちろん酒宴もついてまわる。あれこれ含めて貴重な教育の場であった。この時のシリーズを第一弾として、同じグループによる古典訳はなお続く。

竹内好と松枝茂夫は、絶妙のコンビであったのではなからうか。松枝先生が竹内先生にふれた文章の中で、特にわたしの印象に残っている一節がある。松枝先生の都立大赴任が決まったころ、旧同人が集まって飲んだ席で、「酔ったわたしは竹内の頭を膝に抱えてぴちゃぴちゃ叩きながら、おまいも苦労したからな、おまいも苦労したからなと繰り返していた」のだそうだ。あの大きな禿頭を膝に抱えて、ぴちゃぴちゃ叩いているなんて、思うだに涙が出るほどうれしいではないか。

わたしは早大在職の末期に、大学基準協会の相互評価委員となり、ある一日、そのお役目で和光大学を訪れた。悪い予感が当たって、出てきて対応されたのが、表現学部長である松枝到教授だった。室内での話を終わって、ともども外

を歩いていると、父上同様に長身で髭面の到教授に、芝生でたむろする学生たち、とりわけ女子学生が声をかける。到さん、もてるねえ、とわたしは冷やかしたが、髭の教授に学生たちが寄せる親愛と信頼がうかがわれるようで、やわらかな日差しの中、なんともうれしい光景だった。到さんには『奪われぬ声に耳傾けて』『アジア文化のラビリンス』ほか、いくつもの著書があり訳書がある。美術に始まって、歴史、思想、文化の広範な領域に視野を広げた、すぐれた仕事であるとわたしは思う。わたしが初めて先生宅を訪れたとき、到さんはまだ学齢に達するかどうかのこどもだった。わたしたちはみんな「イタルちゃん」と呼んでいた。その到ちゃんが成長して、ここで学部長をしている。わたしが老いるはずである。この日の出会いからさらに十数年、わたしはとっくに八十を越えた。記憶がいよいよ危うくなり、本稿でも誤りを重ねていることだろう。お許しを請う。

先生の死後に、『中国文学のたのしみ』（岩波書店）、『松枝茂夫文集』全二卷（研文出版）が世に出た。いずれも編集解題は飯倉照平さんの仕事である。飯倉さんは竹内好についても、多くの著作の編集解題を担当している。表に現れぬ貴重な作業であって、飯倉さんの貢献を、わたしは大いに讃えたい。

二〇一九. 五. 三一.